

# 祭の継続はどのようにして成り立っているか

～地域内部の様相と「地域そのもの」・「地域なるもの」の接続～

千葉大学大学院 伊藤雅一

## 1. 目的（問題の所在）

今日、地域活性化の活動が日本各地で行われている。特に東日本大震災以降、「地域」というものへ向けて注目が集まっている。こうした注目は、地域に何を期待しているのだろうか。そもそも「活性化」の対象になっているような地域に地域内外の人々が何かを見出し、何かを目指すことはどのように捉えられるのだろうか。本報告では7,8年前に、ある商店街を中心に始められた地域の祭を取り上げていくことで地域のあり様に迫る。外観や経済面で「さびれた」と形容されがちな1つの商店街が、自治会や小中学校、近隣の大学生などを巻き込みつつ運営している祭は、どのような存在なのだろうか。祭の運営のあり様を捉えていく中で、地域のあり様を考察していく。

## 2. 方法

本報告では、祭のスタッフとしての参与観察、祭の運営を継続的に担っているスタッフへのインタビューを主なデータとして扱っていく。私は2009年から月に1,2回開かれる祭のスタッフ会議などに参加を開始し、現在も継続的に関わっている。インタビューは祭の運営の中心的役割を担う商店街組合に所属する5人と、地域外部から「通い」で関わっているスタッフ1人および大学生4人を主な対象とした。

## 3. 結果

祭は、商店街組合に所属する中心スタッフ5人を軸に、その時々その場ごとに打ち合わせや問題解決が行われて、絶えず調整が繰り返される「現場調整的な運営」によってなされていた。その調整は「暗黙の了解制度」と呼べるような、地域独特の人間関係や諸団体との関係性の影響を無意識的に反映していた。スタッフ会議やイベント手伝いといった、部分的に祭と関わる地域外部の人々にとって、地域内部への理解が断片的になることや安易な予測にしまう構造的理由はここにあった。地域外部からの断片的な地域解釈「地域なるもの」は、地域の総体的実存「地域そのもの」をあまり捉えていない。

## 4. 結論

地域内部の機能未分化な生活世界は、地域外部の機能分化した生活に慣れ親しんだ人々にとって理解しがたい構造になっている。見える範囲を理解しようとした結果、地域の人間関係をネガティブに捉えた「しがらみ」という理解や、スタッフの仲良さそうに活動に取り組む姿を見て、あるいは「適度な参加」を通して「あったかい」などというポジティブな理解がなされた。こうして「地域そのもの」に対する「複雑性の縮減」を経て「地域なるもの」が表出させる。例えば、調査先の商店街を「さびれた」と形容することは外観や経済面に視点を限定した上での「地域なるもの」と言える。地域に対する期待が「人とのつながり」や「あたたかさ」である場合、こうした心情的な機能を地域に期待しているといえるだろう。だが、「地域そのもの」は都合よく機能分化していないため、「期待通り」にならないことが多い。地域のあり様を捉えることの難しさが構造的に明らかとなった。